無名通信

9

1960 4月

三井三池の環流

森崎和江

午前四時半まえに、組合員はぞくぞくと居住地の斗爭本部に集合してきた。「三班の吉田」「はい、三班の吉田さん」「八班、下川」「はい、八班の下川さん」　斗爭本部の入口から組合員は日々に出勤をしらせる。それをせたちや低能をしてピケへ出られない組合員が受けては、名札を裏返していく。「おや、あんた、よかな風邪は」「寝とらるるかし」　明渡しの筵に寝て流感にかゝった者の名札の上には、赤十字のボール紙がつきさしてある。温泉マークをかいたボール紙がさかさにして名札の上につきさしてあるのがみえる。「ああ、これは外出るすけん、サカサクラゲのマークばはっつけた」あらゆる部分に、こうしたユーモラスな大衆の創意が発揮されている。

今朝は、第二組合が夜行就労をする。全員ピケに出動。「カメラをもっている人は、みな持ってきて下さい」「双眼鏡をもっている人は、ぜひ持ってきてください」「近くの方でお湯がわいているところは、すみませんが持ってきてください」「お茶をわかしている時間がありませんので」　こうもた放送が鋭くいうことなく、スピーカーで流される。妻の編入れた拝借して組帯でゆわえたもの、前っぽうの編入れの襟がまるくなって、さながら川舟船頭の風俗のもの、カッパの上から帯を巻き、靴下をズボンの上にのしあげたものたち、鉄カブトに鉢巻きをして怒号並ぶ。そのどの人もが、ボソリとした口調で意見をのべる。「もう就労しとるもんは、くたばれとる頃ぃや。あまり長うぼっとると、中から暴動のおこるばい。それば心配して今日は芝居するくらいのもんたいし」「どぼんな、いっちょ煽動ばしにこっそり入るかし」

深夜からピケにつめているものの妻たちは、同じく四時半まえに寝りめしをこしらえて集める。それをオートバイで運ぶ。出て行く組合員の動作も純重と評したいほどにテンポがずっしりしている。まっくらな星空。妻たちが拍手して送り出す。「とうちゃんがたとえ怪我させられようとも、ピケに出てもらわなさけんし」「行ってよかなら、わたしさちゃ行

こうごたるし　「ここで負けてできるもんの。うちのばばしゃんがボロボロ涙ば流したと。ばばしゃんも坑内仕事ばしたとですけんの。『三代も穴の底さにもぐって働いたとに、孫の代になって首ば切るちゃ何ごとか。刺し殺すちゃ何ちこつか。ろくろく金も儲わなかかしといてもというてますのし

「ほんにあの頃は一日働いて米一升ばやったけんなあ。野菜でも着物でも米と替えて弟を足しよったし

「あたしがたは事故で死んだとじゃけん。あたしどんが負けたなら、どうちゃんも浮かばれんし」口々に話しながら散って行く。

流血事件以来、組合員や炭婦会の者たちの憤が全った。一人一人が自らの怒りにもとづいた行動目標を持ち、ゆるがなくなっている。一突き毒つき刺したくなる、暴走する牛をみな内部に目覚ませた。その直接的な怒りと、体験にねばりこんでいる親愛がかい支配者への憎悪とが、二本の糸のようにきらきらと織り交わされている。ひとつぶひとつぶが、そのように開花しているのは、これはたいへんなことだ。生活の実感が上じみ出ているおばさんたちの結束感。認識のすじみちを表現するにためらわなくなった坑夫たち。下部組合員の自発性がこれほどふんだんにあふれてくると、もう活動家と称するものの個別的な首切りなどはどうしようもなくなってくる。一言にして云えば、大牟田には行動の主体的主役彼ら組合員大衆がいるばかりである。それを十重二十重の伏目があな顔がとりまいているに下ぶない。

圧倒的多数と人間的な重量感とを、三池労組が市街にたむろしている。正史の転換期に主動的に立っている。[illegible]者たちの、言の長い振幅に、[illegible]に入りこんだ者が水を吸いあげたように、[illegible]えっている。彼ら労組員は、マス・コミが傾向する[illegible]二組合の成立を疑にしていない。第二組合員を眼中にしていない。

「かわいそうに、労働者コンプレックスをもっているものだから、事態を正視できない故らるす」という。そして、それを弱者をくりかえし利用する背後の権力を憎む。第二組合結成のために三十三億円がつかわれている。マス・コミに対する嫌悪と不信は底をついていて、差も彼も新聞を止めた。世論を巧妙に導き出すやりくちにふんがいする。中立公正ということが階級的に成立しないことを悟る。なんとかして、二ちらの報導機関を育てたい、という。

国家権力の代弁者、ゴン棒をもつ警官は、なんとい

う憐憫の情をみられていたことだろう。そしてこれら权力へ対する善意のような直接な反応は、その透明さゆえにかえってあんたんとした暗さを三池へ集中する我々の視線の中を開く。

支配的地位を彼らは集団を体験した。より深く集団化させることをその存続を保とうとする。炭婦会の一支部長は語る。「かなり落胆したっもりでしたけれど、方向があやまっていたように思いますね。自発性も相当に出ていますけれど、主人がオニ組合に入ったのを泣く泣く入るのをです。一人二人は夫がオニ組合に入ったのを、荷物をまとめてこちらにとびまっている人もいるのをですけれど」　住宅地に入りこみ、夜は組合員宅に泊めてもらった。八十名ほどの男女が集まり、座談会をした。私は或る支部での話といって、その支部長の話をし婦人解放運動としての彼女らの決意を問うてみた。男女あわせ、異口同音に「とてもまだそんなことは。別れては食べていけなくなるもの」「家庭をこわしてまではねえ」とこたえた。各支部の近辺や居住地の入口には警官と労組員がむきあっている。一目瞭然、労組側に士気と人間くさい密度がある。その労働者たちにあふれている明朗単純な集団性。その内側に、こんなに初歩的な幕が垂れこめている。それを切り裂くものこそ、企業連の暗くだけを吹きとばす。三井三池の斗争には、その萌芽がある。私は、腕を組んで唄い、交互に発言する一群の男女の輪を、ぼんやりと眺めている若く老いた警官の横で、その萌芽を抱きしめていた。おそらく　変革の勝間というものは、このように絶望的な様相の底にきらりとした一筋の光をひそめてやってくるのだろう。

前に述べた前夜のピケ隊が帰る。「ポリ公！」「かえれ！」の合唱があまり盛大すぎて、「ほんに気の毒かったのう」といいあいながら。「全員集合すりゃ、なんちすごいとじゃろう」　自ら感嘆し（）ながら、彼らの様貌は、もはや半可な生を肯定できなくなっている。

あそこにある徹底へ向っていく傾向に親ふりたい速度をあたえるために強力なコン棒が欲しい。「たのみます。実状を伝えて下さい」という声々に手をあげ、子供と共に赤旗をくぐってかえってきた。

バーの女たち（二）

梶塚田鶴子

十二月に入るころ、私の心の中で激しい働りが、一つの血のかたまりのように華をたたきつけはじめました。いままで夢中で過した毎日が、次第になれて他の部分へ目が開いていろいろ観察しだし、店のあり方、店の方針についての疑問、客へ対するサービスの仕方などに、えたいのしれぬ怒りがわいてきたのです。故に一つ不平もいわず一生懸命働き、のめぬ酒も口惜しに量を重ね、スクリュウドライブというジュースにアルコールの入ったカクテルをジュースとだまされてのみ、全身火だるまのように血がわき、胸がはげしく高鳴り、頭がぐらぐらきついに床についたこともあるほどの日を重ねました。いつの間かサービスの心構えも身につき、着なれぬ着物も自分のものとなり、化粧も落着き、みるまに一輪の水仙のごとく酒場に咲き開いたというわけ。一生懸命店のために働いているのでした。にもかゝわらずその熱意努力を認めず、金持の客をつかめ、もう少し積極的に上手に飲ましお金を使わせよ、常にエレガンスにしとけ、貧をよごれものなんかは厳重に差別しとけとか言ばかり、女たちを蔑にしよんでは、あの人は金がないのでサービスもしないでいにくっちゃっておいて他のテーブルへいけとか、さんざんいわれます。社長級病院長級とか、とにかく大きなバックをもっている人たちには、無理にでっち上げた愛嬌でもってママさん自らサービスをするし、女たちもそれにつれられいろいろと特別にしているのです。

私は最初から平等にすべての客に対してサービスしていました。蔭に呼ばれてはいろいろといわれましたが、そのときだけはいといって実際の行動は変りなく続けました。ところがママさんたちの目が光り出し、監視が始まりました。バーは大牟田市内でしたので、客の中には三井鉱山の人たちで、コーラスの人もいました。そのコーラスの人とコーラスについて語り、一緒に歌ったりしたのです。みんな善んでくださいました。バーで二人な歌声を聞くなんて、ずいぶん感動していたようです。ところがママさんはものすごく、あのような歌をと思想的だと思っているらしく不気嫌きわまりない顔で冷たく私を見ていました。

二、三日とび出して帰らぬ女もあったりしてバラバラ

の不愉快さでした。女たちの中で最年少の真理子という娘が、ママさんたちのまわしものを都合よくあることないことを報告し、客にも吹聴しているのです。そのために他の女たちは非常に迷惑し苦しんでいました。誰でも暗い過去苦しみの過去をもち、現在その苦しみにつかまれあがれ出ることができない者ばかりなのです。そのような人たちの過去に軽々しく耳を傾け、深くみきわめもせず、ママさんたちと一緒になって冷たくあざ笑うのです。ママさんたちは借金だけうんと背負わし、働け働けと打ち続け、爪の先ほどの暖かみも覚悟も持っていないのです。そのことについてみな不満を抱えていたようでした。ぼそぼそと真理子さんがいないときをみて批判しあい、クリスマスにはストしようとか話しあいました。しかし、どのように動いたにしろ、女たちの力は非常に弱く、蚊の鳴く声ほどにもふさいのです。ある者は、ある一件でママさんに世話になり、そのことをいつまでもいわれるのを、ここにいる間は絶対に文句はいえないとじっとがまんしているのです。借金のため、がんじがらめにしばられ、そのために仕方なく働いているといったぐあいです。なにも云えない、いったら冷たいしうちで給料も安くなる、といった考え。自分かわいさのためだけでなく食うためにがまんしているのです。女たちはほとんど高校や専門学校を出ていました。現在のままでは将来どうして生きていくのか、嫁にいくことができるやらと、みなそれぞれどうにかしなければと、あせり苦しんでいました。自分の力ではどうにもならないと、半ばあきらめにに気持で一日一日を送っています。このような状態にある者を救い出すことは非常に困難です。また半面やすやすとできるのです。それはつまり、女たちに勇気を与え、寒い寒り合う場所を与えることが必要です。気長がく適確に、わかりやすく面白く、安心を持たせ心と心のふれあいを感じさせるような場所が必要なのです。このような立場の女たちは、常に平均なく空にぶら下っていて、びくびく落ちつかず、一時の心のよりどころだけしか持ちません。そのために笑いも影が薄く、社会一般人に対して劣等感が強く四季の情景にも遠ざけられている状態なのです。これほど恐怖に満ちた生活は他にはありますまい。

正月もあと三日、十二月二十九日、午后一時にバーをこっそり平常と変りなくよそおってぬけ出しました。結婚を口実に今月一ぱいでやめさせていただ

ますと数日前に申したのです。一応理由も聞かれ承知もしてくれましたが、次の日よりいまだ以上に冷たい監視がはじまりました。年寄の聞くたび時間を、日数をかせぎました。十二月二十八日、この日が今月の給料日です。私たちは生中で一番の家賃月なので財ふくらませそわそわ部屋の中をいったりきたりします。十一時すぎやっと待望のものがきました。一名ずつ報場と称する部屋によばれ、お金袋をいただいて足音も軽く二階へ上ります。ある者は期待した給料が四千円も一度に差し引かれたとか、ある者は就は月賦のはずなのに一度に四千円も引くなんて定金買いと同じだとか、それでも暮の支払や正月の買物予算を立ててすぐさま街へデパートへと出かけるのです。私の順番は特に最后でした。今月中で商販するといったので給料はくれないかも知れないと思いつつもやはり待ったのです。女たちは一人去り二人去りほとんど姿は見えなくなりました。やっと私の名前が呼ばれ報場へ。報場にはマスターはじめママさん、マネージャー、レジー係、おまけにヒマのばあさんまで、ぐるりと輪をなして私の入るのをみています。私は静かに座りました。マスターが、「田鶴ちゃんは今月でやめるんだね、本当かね」「そのつもりです」「せっかくなれたのに」と。ママさん「給料を計算したところ、今月分は七千幾らかに成っています。貴女の現在の借金がクリスマス前ワンピースを入れて約一万円あります。それを差引いたら三千八百円ほど私どもの方へ頂かなければなりません。したがっていつか買ってやった着物二枚を足りない分の代りに置いていって下さいし」と特別のある冷たいママさんの声です。私はさっそくお返しします」と挨拶し、静かに二階へいきました。ぽつんと広い部屋に一人座って、明日から どんなにすればよいのか、無一文で帰る旅費もなく一体いままで何のために働いたのか。いままで使用していた机も窓ガラスも、鏡もタンスも冷たくじっと私をみつめているだけです。一刻も早くここを出たい。ぼんやりしてもはじまらん。荷物の整理かたづけをしていると、佐吉子さんたちが帰ってきました。「田めよ全然、着物まで取られたよ」といえば、「え？まあなんって冷たいわからず屋の人たちかしら。借金はあるとしても一文もやらないなんって、麻金はどうなったの、いくらかあるでしょう」「ええ、五千円ほどあるわ」「じゃどうにかしてやればいいのに」とそれ以上のことはいうことも頼む

ことも出来ないのです。そしてその夜のうちに友達に借金し、手荷物をまとめ茶箱一つは佐智子さんに後で送ってもらうように頼み、逃げるようにしてかえったのです。

新年を迎え　現在の「サークル研究会」に足の世話を仕きに出ました。バーにあずけていた荷物がまだ送って来ず困っていたので、二三通家族の手紙を出し、それと同時に「無名通信」を女の一人へ送りました。その他少々生意気なバーへ対する意見を別便で当当に送ったのです。それに掛金の二ヶ月半ばすぎて直接バーへ出かけました。荷物をとりに、公衆電話で佐智子さんを呼び出し、用件をのべそちらに行くからと申しますと、彼女まるっきり様子がちがうのです。「はいはいそうですか、よろしいと思います。ではしないと幸人的で。これは何かあったなとピーンときました。「無名通信」がママさんたちにみつかったのでした。マスター　ママさん、マネジャーの三人が入ってきたので挨拶をしかけたとき、マスターがしのすごい勢いで、「よくも来てくれた、お前は何のうらみがあってあのような手紙を書いたのか、お前の考えていることはわしは知らん。知る必要もない。しかしうちを仕いている女たち迷惑前の考え通りの思想を吹き込む必要はあるまい」と、われ鏡の如く、ヒきびあとの穴が残っている顔で叫びました。ママさんもその勢いに乗じて「私共は精一杯のことをしてやっている。田舎ちゃんは怠いし水商売のことについて何もしらない。この商売は血と涙の戦いであり、私も人々に云われぬ苦しみでもって今日迄やり上げたのです」と反こらしに、満足そうに特徴のある目玉でもってしゃべりまくります。なにが精一杯いか、何の苦しみがあったか、その手足体で何をやったというのか。どんなにして女と客から金をとり、いかにして他の店よりもうけようかと必死であったのであって、その他のことについては何の意味も含んではいないのだ。血と涙の斗いであったなら、なぜこのどろ沼のような地獄から女を救い出してやろうと努力してくれないのか、それができないにしろ　なぜ相互に生活していけるように努めようとしないのか。現に女たちはしがいているのだ。それはなぜか、それすら知ってはいない。じゃあないか

（つづく）

村の女教師

井久保伊登子

二、女先生のする事

豊阪中学校は校長以下九名、教員ばかりの水入らずだった。小使いも、事人員も、給仕も、教員も、凡そそうした職員は全くいなかった。その上産休で久永先生不在の今は、四十五六の教員三十代の教頭、阿佐、西崎先生、二十代の独身の千田、岡崎、笹井先生の中で満二十二の私は最年少で唯一人の女教師だった。

新任式の後、私にも職員室に席が与えられた。それは真正面の教頭の机を挟んで、南北両側に向き合って並べられた机の末席だった。その時、他の男教師達は、生徒の応待をし、命下に飛び出して行き、書き物を南いたり出じたりし、校長に書類を持って行き、お互いに頭を寄せ合って話し合い又離れて行き、新学期らしい海を作っていた。その中でかたがたする椅子に腰を落ちつけたまま私は丁の前の教頭との話しあいを反芻しては小っさいない気持に捕われていた。

〈国語教師として責任していながら、国語は一二年の三学級を受け持つ位けでよい。その代りに全学年の家庭科を受け持つといわれた。こんな田舎では教科担任教師の不足を臨時免許状とやらを出して補うという。どが大体考えても見るがいい。自他共に無学問者を置っているのをよい事に、針からも糸からも遠ざかって年を喰れて来た私。人に尊ぶ不らの何か仕立てろといわれれば、どれ程不器用とかやってみよう。又、本を見ながら何か料りてみろといわれれば、いかにまずかろうとも、とにかく作ってみよう。ところで教えるというのは訳がちがう。この一年前の、百五十人の生徒の家庭科の知識と技術に関して全責任を負わねばならないのだ。

そんな事がこの私にできるか。私は国語の教師であって、他の何の科の教師でもない。どが私がそれを云った時、教頭は、ではピアノがいけるかと云った。私がどめどというと、音楽も教えられないし、明らかに眉を顰めた。彼は、音楽も家庭科も教えられる女教師はこの学校には要らぬとまで切わせた。国語主任はもう久永先生に決っているとも云った。

こんな出鱈目があるか、いっその事、帰本を使次徒

食の中に高校の国語教師の職をあてもなく待っていた方がましではないか。が、二進も三進もいかなくなった私は、責任は持てぬと念を押して家庭科を引受けてしまった。

彼は又、この学校では原則的に女教師の学級担任はないといった。所謂小うるさい事がないと云うので雰囲気かも知れぬ。だが学級の生徒一人一人との密度の高い接触がなくて中学校の先生稼業の取得が他にあるか〈

箱の中にそんな乗り言をふっふっさせて、机の抽出しに残っている試験用紙の余りや教案の書き潰しを空き箱に捨ってはは捨てた。それは嵐の小便の臭いがした。抽出しの奥には固い糞が転がり、左右どちらの抽出しにも嵐の歯形のある大きな穴があいていた。と、教頭に肩を叩かれて私は顔を上げた。

彼は女のように暖らかな声で話しはじめた。

「先生にや学級担任がない代り、いろいろして貰いますけんね。今日はこの校長挨拶廻りがありますからえええですがあしたからはしと彼が挙げたのは、男教師の当番と同様、女教師が交番で受けもつ日直勤務として、子供を使いながら、火熾し、湯沸し、茶汲み、客の接待、電話の受付け、子供の病気や傷の手当等だった。「その他、先生等の仕事の加勢や冬期味噌汁給食のように、臨校応変、何やかやして貰います」

今まで他人事として耳にしていた、職場での余りに明らかな男女の差別を明るい声で語りかけられると、その言葉の一つ〳〵に私の神経はかりかりひっかかった。しかしそれに全く気付こうとしないで色艶よい赤い小さな顔を見ている中に、一々抗うのが煩わしくなって来た。

翌朝七時過に丸庄屋の食事はすんだが、机も座蒲団もない、寒くて暗い部屋に戻る気もしないので学校に出かけた。

三船屋に朝食に行くという宿直の阿部先生に挨拶をして、白木の粗末な扉と低くて狭い土間のある玄関に入った。上ってすぐ右にある宿直室の木戸の前から右に曲り、薄暗く薄まった、二畳とない校内売店、だだっ広い炊事場、会議室応接兼用で電話もそこにある校長室を右手に眺めながら長っぽい廊下にスリッパを鳴らせた。そのつき当りの大きな職員室の、入口に一番近い私の机の上には担任する家庭科と国語の教科書が重ねてあった。

スタリンプを羽織った肩を丸めて、掃除、料理、

教壇、家族関係、家計表と紙枠内につめ込まれた表っぺらな本の挿絵や図表に目をさらしている中に辺りは明るくなってきた。

運動場や教室のあちこちには子供等の声が湧き出るように聞え始めた。

窓を開けていると、紺の上っ張りにズボンの女生徒二人が肩を寄せて戸口に立った。

二人は私が一番早いのに驚いた様だったが、すぐ人なつっこい調子でマツチがないと訴えた。日直の彼女らはこれから生徒用の茶をわかすという。学校用らしいのはなかったのを職員室の机の上の大瓶迄すぐ返すのよと言って私も炊事場に急いだ。

ノッポで目の大きい女生徒は、室の右隅にある大小二つの釜のかゝったかまどの前に屈み込むと、傍の石炭箱の紙屑を中に押し込んだ。今一人は小さく緊った体と顔に、切れ長の目が殺に印象的だったが、彼女は左隅の天井まで仕切った大きな戸棚からアルミのバケツを引き出した。これから石段の下の店まで水を貰いに行くという。見がこの運動場に面した窓際に、細長い流し場と三つの水道栓があるではないか。それをいうと、ノッポの智恵ちゃんと呼ばれる女生徒はふり返り様云った。

「モーターが壊れたいうて水は出ません。去年の夏からなんぼすと小柄の娘子も、日直の時ばかりさはさい、掃除にも習字図画の時間にも当番は水汲みに行くのじといった。

「ほ、日直は責任二人さりしと聞くと、各学級から二人ずつ出るという。一年一学級、二三年二学級だから十人じゃないのゝというと一年の日直はまだ決っていないし、男子はけやってばっかしゝとないさって三年の娘子と二年の智恵は肯き合った。その時「遅うなってごめんしと言葉をはずませて女生徒がまた二人駆けて来た。娘子と一緒に彼女らも手に手にバケツを振りながらかまどの後の引戸から裏庭のまま運動場に走っていった。

黄板に張り付けて、かまどに薪をつっこまんばかりに燃えた智恵は手元に取り寄せた小枝を膝の上で折ってはくべた。それから薪の束から一本ずつ抜いては用心深くさし込んだ。

その華奢な体つきに似合わぬ頑丈な指と巧みな手捌きが意外だった。

「こりゃ、おどろ木も束木も湿ってしもうとるわめしという彼女を、焚き口から噴き出た烟が包み込んだ。振興用の湯呑みを洗ってはアルマイトの盆に伏

せていた私は急いで窓に手をかけたが、開りかけた窓枠は乾んで動かなかった。「どら」と私はかまどを覗いてつつきかけたが慌てて手を引っ込めた。見事に三つに割れたロストルが辛うじて薪を支えていたのだ。

水汲みの少女等が盛に水を入れて又駆け出していく間、私は通気孔に蓋のないと聞に新聞を燃し、上った焔に薪の堅炭を手掴みにしては投げ込んだ。かまどの廻と室り合い、息もつけぬ程になった薪の煙にむせながら暫くばかりの間窮をはた〳〵云わせた。

炭がぴち〳〵音を立てはじめた頃、校長室の電話がけたたましく鳴って男生徒が呼びに来た。私は救いを求めるようにふり返った。

「わたしがします」二度目の水汲みから帰った克子が雑巾をとった。

支所からの電話を受けて職員室に入ると、この村に下宿している若い男教師達は机に向ったり、生徒と話したりしていた。園番の西山志生は教頭の机の後の時計を見上ると、八時十分掃除開始の鐘を鳴らした。玄関の昇降口に小走りに行った。鐘と共に廊下の向こうから並んだ生徒が「始めましょう」とこたまのように云い合った後、校舎は急に騒々しくなった。

その時、校長や阿部先生とバスで来た教頭に、今番の本庁からの文書を取りに来い、との電話を告げた。彼は肯いてから通りかゝった男生徒を呼び、潜らかな声で「よい〳〵勝谷や、支所まで書類取りに行ってきてくれ、な」といった。

「やんれ、しわいへきついのお。今学校へ来たばかりいうのに」と捨てぜりふを残して他んぜ表情の大きな体の少年はかけ出した。

「おい〳〵静かに行かんか、早う取ってこいや」と教頭の声がそれを追った。

克子の燃してくれた火は教頭の指図で校長室と職員室の木火鉢に移された。職員室の火鉢にかけた湯が沸き、子供の茶は呑めぬ教頭の気に入りの茶を入れ、まず校長に献上した後、火の回りに談笑する男教師一人一人に、「どうぞ」「どうぞ」と配り始めた時、私は自分の姿勢がそれだしているのに気づいた。「いや」と軽く礼をして、この間まで他の女教師達にされていたのと同じサービスを快い当然さを受ける若い男達が、これまで作ってきた室にたった一人でがつがつ働いている彼らより一段下の仕事に甘んじて自分の思い上った我まゝさを悔めた方が、という合理化を始めていたのだ。昨夜、教

頭の言葉に抗おうとしなかった昔時の自分にあれ程拘泥し、この水泳りの習いに無抵抗に流れこむまいと自身にくり返した私だったが。一方では、卒業前から、女は、と言われ続けながら職を求めて駆けずりまわった苦い記憶がちらちら消えては蘇っていた。

井戸端会議自己診断

博多グループ二月例会

参加者　岩見順子　河野信子　豊原玲子
　　松尾せつ子

A　私たちは現状に満足してはいない。どう生きたいのか、出してみよう。

B　どう生きたいか、という場合、やはり結婚の形態について考える。自分の一生の仕事を持ち込みたい。

C　できる限り務めはつづけたい。止むを得ず務められない場合は、サークル等で社会的な創造の場につながっていたい。その場合に思うのだが自分の場を持っていても無収入であれば結局は不に従属してゆく形になるのではないのか。至清的独立がないと精神的独立もないと思うのだが。どう考えたらいいのだろう。

A　働くにこしたことはない。しかし今の社会では女が自分らしく生きる状態ではない。また精神的な自立が至清的独立に先んじるものだと考えられないのはおかしい。

B　この前、長島さんの分業論がでていたけれど、家事は分業といえるかしら。

A　いえないと思う。家事は今後ますます社会化していく傾向にあるし。

C　家事が激減しているこのごろ、確かな仕事にしがみついて　分業でございますというのはみにくい。けれども子供を育てることは大きな仕事（に）だと思うのだけど。　既婚者にあづけることに抵抗を感じるのは、育児が女の聖職とか天職とかいわれてきたための、厚史的感覚にすぎないのかしら。

A　私は、親と子の血縁べったりという感覚が思考のなかに入ってくるのはヅッとする。自分の子供に血縁論理をおしつけることはしたくない。

B　新しい生き方をしようと思っても、親が圧力となってできない。それは血縁べったりから脱け出ていないから。

D 例えば親思所にあずけることによって母と子供はそれぞれ独立した人間としての関係のてがかりが生まれるかも知れない。

B 家事・育児が女の重荷として評価されたのは何故だろう。

A 男の所有感覚から疎外されたものが、立派な家庭をつくりましょうという形で出てきた。

C ところで夫婦は何だろう。

A 共同生活をとおして集団へむかう最低単位でしょう。

D 今まではダンナサマ中心思想のエネルギー補給場だった。

A 男女が共同で社会的創造をはかる場。

C 現状ではせいぜい女が娯楽をもち、家事労働をする、養われていることの代価を支払う。そういう理由で相互に支配被支配をこえた自己存在の意味をもたせている。

B 世地族では、夕方となれば興奮が化粧していそいそとダンナサマを待つ。飾らない友人にT部主人にきらわれますよ」と忠告する。それをみているとゾッとするって。オンリーの感覚にささえられる夫婦関係は淋しすぎる。

D 女たちは、夫と対立し　夫の所有意識を否定していく過程で自我を確立していく。ところで、私が「どう生きたいか」と提出したのは、今の自分の現状をどう破りたいかという意味だったの。そこを考えてみよう。たとえばこういうことがいえるでしょう。私たちが現状をかえようという時、男の線に立ちたいというのではない男に代って所有者になることではない。男たちは、俺の仕事俺の家と個人を強く打ち出す。新発見しろ思想にしろ個人の遺産として評価する。ところが非所有者の感覚を基本にしている女は、失うべきものがない（労働者と似ている）から、もっと進んだ形へ現状を引きあげていけるのではないか、ということ

C 実感としては、その可能性を感ずることができる。具体的な方法がみつからない。

A やはり連帯のいみを深めることに全力を注ぐことでしょう。

C とすると、この無名通信のなかでも各自の思想的な場をはっきりしていくことね。

D 新しい女性解放の内容を一人一人がみつけることと思う。

A　そういう人々は、職場でも家庭でも従来のものを崩していく力になる。

C　自我が確立されていないせたたは、意識した連帯をつくれず、ムードにたよった感の浅いものになるおそれはないか。

A　いや、それは違う。連帯意識は自我の確立と同時に生まれるのだから。社会主義革命はブルジョア民主々義革命を至なくとしてきた。女の問題は階級の問題と同じ重さをもっている。ところで自分をふりかえれば、私は多分にブルジョア的所有感覚が残っている。共同創造ができない。自分の仕事とサークルの間が切れてそれぞれ単独で行われる。このあたりにサロン的といわれる理由があるのかも知れない。

B　私にもプチブル性が支配的にある。つとめ、サークル、家庭が切れ相互にそ首がないかのようにふるまう。

D　仕事に対してもせっぱつまった感じがしてない。本気にならねばならぬことは沢山あるはずなのに。

A　投げているのよ。無名の意味を探そうといいながら。月に一度ここに集ってしゃべるだけそこの間が切れている。一貫した姿勢がない。

C　分ったつもりでも日常生活での手がかりとならない。いきいきとした物と物との触れあいがない。実在感覚がないという実感に悩まされる。それをどう克服したらいいだろう。

A　実在感覚の欠如は痛感する。もっと日常感覚を分析せねばいけないと思う。

B　書物と向き合うほど人間と本気で向きあわない。向きあうとき、私は自分を固みたい気持がつよく、人に働きかける熱意が弱い。自分が変る過程でしか人に働きかけられないと思うが、自信がない。それは自分がいい加減だということなのだが。

A　自分から働きかけねば状力の側から変えられてくる。

D　そうだ。働きかけなければ結局は支配される。

実在感覚欠如、観念的、サロン的、などなど多くの感覚にかてて加えて、話しながら私たちをおそう空しさがある。だからといって二の集まりが不毛だと、せっかちに断罪すまい。

（文責　横原）

会員消息

○今川清枝さんは、青年文化運動を通じて吉田昇平さんと結婚されました。清枝さん御新居と近況おしらせください。

○福田久美子さんは三宅氏と御結婚。長崎県名瀬市に転居されました。

○岩見順子さんは栗城氏と近々結婚。たんぜん順子さんがファイトマンだと悪友どもの弁。大阪市に転居しますので、大阪のスループの方々、集会の場に彼女の新居を御利用ください。あなた方の非公然活動はすでに紹介しています。住所わかり次第お知らせしますから。順子さんは交流を切望しています。

○阪田さかえちゃん、四月五日女児安産。父と母との世界を、ずっしりと握らせていくでしょう。

無名通信 9. 1960・4・10発行

あむつを編集部宛に送ってください。

○片瀬ひろ子さん、五、六月頃に「レイン家詩集」を出版予定です。坊やはまだ幼稚園。

○村田節子さん、中尚美代子さん、井久保伊登子さん、宗俊子さんとは二二の夏に母親になります。母親誕生の感想をまちます。

○松尾みお子さん、安保反対の美術家集団アンデパンダン展に出品。広場の美術サークル員の許可なしの仲間さ一語感銘に残る作品だった。

○河野信子さん、中尚市のどんぐり会に主婦学テューターとして月二回福岡から出張。

○中村きい子さん、平凡社出版。「日本民俗物語」第三部に「カヤカベの村」「薩摩士族の最たちし」を執筆。

○森崎和江さん、同じく「日本残酷物語」第一部に「炭鉱ヤマの女たち」第四部に「川舟船頭」「現代新」「詩学」に執筆。

○消息欄を設けます。不用になった子供服のおしらせ、入用な本の問合せ、会員への通信など何なりと利用しあいましょう。皆さん近況おしらせください。

編集部の江藤田鶴子へのカンパのお願いです。商婚当時の借金返済は三万程に減りましたが、子供と二人の自活生活が底をつきかけ、りに貸す時間と労力が保てない状態になってきました。月百円を今年一ぱいのカンパをお願いしたいと思います。昼子供を保育園にあずけて職場へ行き、夜金策に歩かねばなりません。中尚スループの微力に御援助いただきたいと存じます。

責任者 森崎和江

福岡県中尚市本町六丁目九州サークル研究会内